

③「中国社会の『文革』の記憶」

講師：印紅標 氏（北京大学国際関係学院教授）

日時：2007年12月11日（木） 17:00-19:00

場所：慶應義塾大学三田キャンパス 大学院校舎8階 東アジア研究所共同研究室1

言語：中国語

報告要旨：印氏はまず、一般の中国人が文化大革命をどのように考えているのかを概説したうえで、鄧小平を含む中国政治リート達にとっては、「文革」から得た教訓が改革開放に対する原動力であったと論じた。さらに、そのため経済改革は積極的に行ったが、政治体制は比較的改革的必要性を問われなかった、として文化大革命の影響を検証した。

具体的には、中共中央の文革に関する決議（「关于建国以来党的若干历史问题的决议」：決議では文革を毛沢東によって発動され、二つの反革命集団に利用された、党と国家、各民族人民に重大な影響と災難をもたらした内乱であると規定）を踏まえ、これと比較して中国の社会は文革に対し、基本的に否定であるが、社会地位と経歴の違いによって、文革に関して否定の側面が異なることを以下のように詳述した。

- ・ エリート（指導者、官僚など）——被害者として、文革が与えた衝撃に否定的な態度を取る
- ・ 知識人——民主主義と法治を要求し、人格の独立を主張したため、とくに文革による知識人の迫害、および教育環境の破壊に対して批判的
- ・ 労働者・農民——直接的な被害を受けた人たちではないので、主として当時の暴力と貧しい生活を否定的に回顧する

また80年代から90年代にかけて、文学や映画作品における「文革」は悲劇から娯楽（商業化）へ変化したことを指摘し、以下のように総括した。1986年以降から、学校やメディアでは文革に言及することが少なくなり、若者たちは文革に関して明確な概念がなくなっている。総じて、文革の記憶は不明瞭になってきているのである。最近になって、文革の当事者たちの回顧録が香港で出版され、インターネットでも公開されているが、数は少なく、自費出版が多い。回顧録の大部分は自己への弁解が多いが、文革を研究する社会学者にとっては貴重な参考資料となるだろう。つまり文革は、過去の政治問題からますます歴史問題になりつつあるのである。